

子どもたちの未来と被ばくを考える会 ニュースレターNo.7

発行日 2016年7月16日 事務所:和歌山市三番丁6番地 関西電電ビル4F 金原法律事務所内

<http://kodomomiraikibou2012.seesaa.net/> 連絡先・事務局:TEL:073-451-5960 (松浦)

6月19日、第5回総会が開催されました。総会後は、DVD「ニュークリア・サベージ」の上映会が行われ、大人・子ども合わせて15名の参加がありました。観賞後は、みんなで感想を述べあいました。「これはビキニの水爆実験、マーシャル諸島の人々の話にとどまらず、福島の問題と一緒に」という声が多く聞かれました。



○「ニュークリア・サベージ」を観て

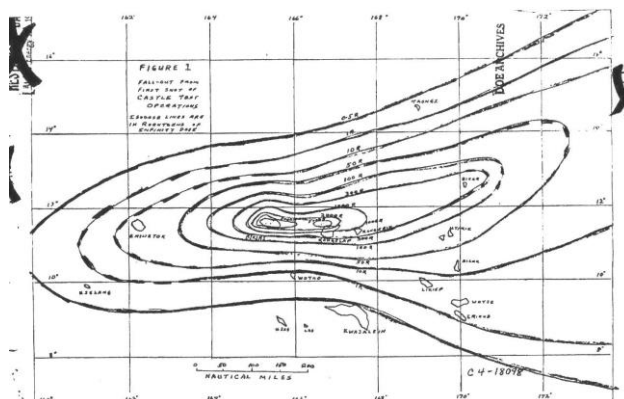
「(島民は文明人とは違うが) ネズミよりは似ている」という実験したアメリカ側のセリフがなんとも強烈でした。「多くの人にとってビキニは水着のこと」のナレーションも。

マーシャル諸島の人たちの被ばくの問題は、それだけにとどまらない。間に葬られた1000隻ものマグロ船乗組員も、原爆を投下されたヒロシマ・ナガサキの人たちも、原発事故で命を落とし故郷を失ったチェルノブイリの人たちも、ウラン採掘現場や核施設で働く人たちも、もちろん東京電力福島原発事故の人たちも、時代を超え国を超えてみんなつながっていて、根っこにあるのはニュークリア(核)のもつ問題だと思いました。明らかなのは、支配者・為政者の厚顔無知な非道ぶりであり、被害者の慟哭の苦しみです。(U・K)

資料1: 水爆ブラボー実験の放射性降下物の拡散状況 (原子力資料室より)

1954年3月31日に現地作戦本部からワシントンの原子力委員会生物医学局に送られた水爆ブラボー実験

60時間後の放射性降下物の拡散状況の手書き地図



近年、機密解除された米政府の公文書や生存者の証言、非公開だった写真などにもとづき、これまで語られてこなかった物語の真実の姿をドキュメンタリーで明らかにした。米国の科学者たちが、どのようにして、この太平洋の楽園を放射能の地獄に変えてしまったのか。マーシャル諸島の人々が、30年にもわたって、死の灰が人体へ与える影響を調べる実験動物として扱われてきたという事実。

巨大地震と15m前後の津波の科学的な資料と対策の必要性の指摘が事前になされていたのに、無策だった為に福島第1原発を爆発させてしまった。その後の福島県周辺の住民が放射能汚染により被ばくさせられた後の日本政府の対応と重なり合っている。放射能の汚染地域に福島県民を放置（一時的には15万人しか避難させていない）し、20mSv/年地域までへの帰還政策を推進する「被ばく人体実験」が福島県で現在進行中だ。（K・K）

「自由と民主主義の確立のために貢献したマーシャル諸島の人々」「ブラボー実験は事故、たまたま風向きが変わり、たまたま人々は被曝しただけだ」と言う米国政府。一方、「私たちは意図的に被曝させられた。実験動物のように」「米国がしてきたことは、“邪悪”という言葉そのもの」と言う島民。

福島原発事故から6年目を迎え、どちらの言い分が正しいのか、手に取るようにわかる。水爆実験とそれに伴う非道な人体実験が、ヒロシマ・ナガサキを経てもなお計画され、続けられてきたことに憤りを感じる。

米国政府は彼らを「野蛮人」と呼び、人を人とも思わなかった。国家安全保障の名の下では、こんなにも残虐な仕打ちができるのか。情報開示が日本より進んだ米国でさえ、「米国が人々を被曝させた証拠」が未だに表に出てこない。映像を見ている間、ずっと息が苦しかった。避難を遅らせ、意図的に初期被曝させ、その後は検診で放射性降下物が人々の身体にどんな影響を与えたのか調べるだけ。世界一汚染された島になったのに、安全だからと数年で帰還させられて、マーシャル諸島全域で66回も実験し、そのたびに降下物で被曝させられてきた人々。放射性降下物で急性症状だけでなくガンや異常出産が増えた事実があるにもかかわらず、米国政府は反省もせず、人々を意図的に被曝させたとはけっして認めない。



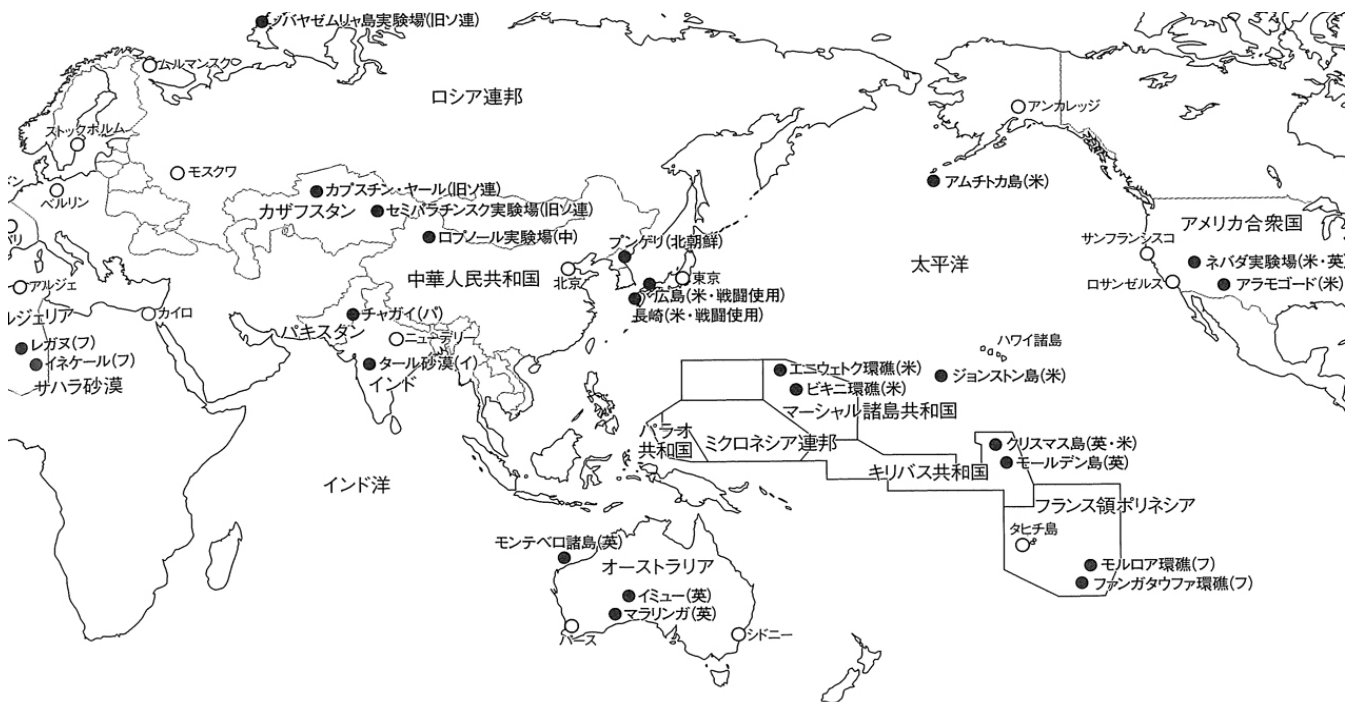
「ああ、これは福島だ」と思った。実験と事故の違いはあれど、この映画を一緒に見た誰

もがそう思ったはずだ。マーシャル諸島の人々に対してだけでなく、いま福島で起きていることそのものだから、こんなにも胸が苦しいのだ。人々の故郷を想う気持ちを利用して、汚染地への帰還政策が進行中の福島。数千～数万ベクレル/kgの土壌で除染という名の移染、汚された水を飲み、汚されたものを食べ、子育てすることを強いられている。

福島だけではない。東日本だけではない。福島の病気を隠すためなのか、日本中に放射性物質で汚染された食料品、肥料や飼料、セメント、建築木材、日用品など、私たちの身の回りには、ありとあらゆる物に化けた低レベル放射性物質が流通してしまった。これら全てを止めたいのに、止められないことの悔しさ。政府の政策で子どもたちの内部被曝は進んでいくのに、6年目になっても何も止められない。そのうえ政府は地震のリスクも無視し、原発再稼働や海外に原発を売り込むことに躍起になっている。なのに、国民の多くは無関心。この状況を変えるには、と自問自答を繰り返すが、人々の意識を変えるか政府を変えるしかないのだ、と解っている。今回こそ、と選挙に全力を注ぐ毎日だ。

映画の最後に、人々が掲げたプラカードに書かれていた言葉。「嘘をつくな」「責任は誰が取るんだ」そう、政府は嘘をつき、責任は誰も取らない。過去も現代も同じ。三世代目になっても子どもたちの健康被害は出ており、マーシャル諸島の人々の闘いはこれからも続く。そして日本は、まだ始まったばかりなのだ。 (T・T)

資料2：世界の主な核実験・核爆発地点（原子力資料室より）



世界の主な核実験・核爆発地点

「子どもたちの未来と被ばくを考える会」は、2011年東京電力福島第一原発事故をきっかけに結成され、核と被ばくの問題に広く関心をもち活動を続けてきました。そして、核による放射能汚染は福島の原発事故以前にすでにあり、多くの人々が犠牲になってきた歴史があることを、会員一人ひとり、機会ある毎に学んできました。

例えば、広島の被爆者たちは、ABCC（原爆傷害調査委員会）により人体調査が行なわれたが治療はされなかったこと。1954年ビキニ環礁で米軍が行なった水爆実験により、マグロ漁船第五福竜丸が被ばく。乗組員が死の灰を浴びて亡くなったこと。1950年～60年代にかけて米ソは100回以上もの核実験を行ない、海や大気を強烈に汚染。死の灰を浴びた漁民や周辺の住民がガンなどでたくさん亡くなったこと。そして、チェルノブイリの原発事故。

今回の「ニュークリア・サベージ」では、1954年に米軍が行なった、ブラボー水爆実験時、あえてマーシャル諸島の住民を被ばくさせて人体調査を行なった、という事実を知りました。



福島原発事故を体験している今、そのような事実を知るのは本当につらいです。何も知らされず、被ばくした人々の無念さが身にしみて伝わってくるからです。被ばくによって苦しみ続けた人々の悲しみ、怒りに共感するからです。

今の日本の放射能汚染の状況、今後の人々の健康被害を思うと、気が重くなることもあります。しかし、目をそむけてはいけない、とも思います。少しずつでも私たちは歩みをとめてはならない、そんな思いを強くした第5回総会でした。 (S・A)

